

親族研究からポストコロニアル人類学批判へ

神戸大学大学院国際文化学研究科 吉岡政徳

はじめに

今回の企画が、東京都立大学に社会人類学研究室が開設されてから 60 年が経過したことを記念する行事であり、主催者側から、この機会に都立大学社会人類学の研究上の連続性を考えたいという提案がありました。私に与えられたテーマが、「親族研究からポストコロニアル人類学批判へ」というものでしたが、このテーマと都立大の連続性をどうリンクするのか悩んでいて、なかなかレジュメすら提出できない中、発表者の一人、出口さんははやばやとがちっとした草稿を書きあげ、みんなに回覧するという状況になってしまいました。そのため、彼のような草稿を作らねばならないし、彼の議論とかぶらないような話を考えねばならないし、と益々悩むことになり、時間に追われた結果、やつつけ仕事になってしまったことを、あらかじめお断りしておきます。

1 社会人類学

さて、おそらく出口さんと視点が異なることになるかもしれませんが、まず、都立大の連続性という点で、社会人類学という枠組みにこだわってみたいと思います。社会学の助手と人類学の助手が机を並べて座っているという状況を考えてもすぐに理解できますが、社会学との近接性を表出する人類学として社会人類学が設定されたという側面は確かにあったであろうと思われます。ただ、社会人類学がイギリス流の人類学であるという点を考えれば、それはまさしく長島信弘さんが述べているように「社会人類学は英国に発した、ある社会を長期のフィールドワークを通して個別具体的に研究する学問である」とうことになるでしょう（長島 2015）。これを引用することで何を問題にしたいのかといえ、それはフィールドワークによる研究重視という点です。都立大の大学院に社会人類学研究室が設立された当時の教授の一人、馬淵東一先生については、フィールドワークを精力的に行う社会人類学者として誰しもが認める存在です。そしてもう一人の教授、岡正雄先生についても、長島さんは次のように述べています。「・・・岡正雄とフィールドワーク中心の社会人類学との関係に意外性を感じた研究者もいたらしい。・・・ドイツ・オーストリアの歴史民族学はフィールドワークをあまり重視しておらず、日本でも石田英一郎と大林太良にはその傾向が強かった。・・・岡、住谷一彦、J. クライナーはフィールドワーク派である」（長島 2015）。岡正雄先生も樺太調査やイヌイットの調査を実施し、学生にはフィールドワークを奨励していたというわけですから、フィールドワーク重視の研究姿勢は当初から貫かれていたということになるだろうと思います。

2 親族研究

フィールドワークを重視した社会人類学の伝統の中で、都立大学が他の大学から一目を置かれるようになったのは、何と云ってもその親族研究においてだろうと思います。「親族の都立」と言われたその研究は、フィールドデータを踏まえたきわめて実証的なもので、「ある社会を・・個別具体的に研究」した結果であったといえます。日本、沖縄、そして東南アジアとそのフィールドを据えて、馬淵先生をはじめとして、蒲生正男、村武精一、渡邊欣雄（よしお）という先生方の名前を挙げれば、その成果は思い浮かぶだろうと思います。しかし、こうした親族研究は、ニーダムとシュナイダーの議論によって冷水を浴びせられるようになった、ということは周知の事実でしょう。

ニーダムは1971年に、「非常にぶっきらぼうに言えば、親族などというものはない」と言明し(Needham 1971:5)、シュナイダーは1972年に、親族は「人類に知られているいかなる文化にも存在しない」と主張したわけです(Schneider 1972:59)、その結果、その後20年近くにわたって親族研究は停滞したと言われていますが(小川 2008:53)、二人の「構築主義的」とも言える親族論批判は、概念としての親族をベースとした親族論、親族理論には確かに大きな打撃を与えました。そのため、親族研究は、社会人類学の主流の座から外れることになったといえます。しかし、二人の「親族はない」という言明の背後にある視点は、多少異なっていたことも確かです。

ニーダムは、人類学的な概念は単配列的なものだけけれど、現実の社会に生起する出来事やカテゴリーは多配列的であるため、人類学的概念で捉えることのできるものはない、という意味で言ったのであり、人類学概念それ自体に対する批判だったといえます。従って議論は親族に限定されるものではなく、もっと適用範囲が広がったわけです。そして彼の指摘は、親族論否定という側面よりも、比較研究に対する批判として広がることになりました。それに対してシュナイダーは、親族関係の基盤は生物学的な関係であると考えてきた人類学における親族概念を批判したのであり、そうした意味での親族は世界のどこにもないと主張したわけです。その結果、特にアメリカを中心とした親族研究においては決定的な打撃を与えることになり、親族研究停滞の大きな要因となりました。

ニーダムとシュナイダーの批判をすり抜ける道がないわけではありませんでした。それは、「実体」を伴わない「形式的な分析」を信条とする親族研究で、いわゆる言語人類学、あるいは認識人類学という範疇に含まれた親族研究でした。この時期の都立の社会人類学の大学院では、人文学研究科におられた言語学者の光延明洋さんが非常勤でゼミを担当するようになりました。その結果、都立大は一時、シェフラーやラウンズベリーらの提唱する新しい親族論の日本における発信地という様相を呈しました。中でも齋藤尚文さんは、生物学的な親族関係を名称の意味の中核に据えたシェフラーやラウンズベリーの研究を批判し、より形式的な同等規則分析を提案することで親族名称研究の深化をはかっていた(齋藤 1980)。しかし、残念ながら、あまりにも形式性が前面に出ることで、まるで

論理的な演算のような方向性に向かい、それを支える哲学的あるいは思想的な思惑も、フィールドワークから抽出されるデータからも切り離されたこれらの一連の研究は、定着することはなかったといえます。

ところで、ニーダムもシュナイダーも、フィールドにおける現地語概念に基づく記述や解析を否定したわけではありませんでした。そのため、親族研究批判からのもう一つの抜け道が存在することになったわけです。それは、民族誌を書くなかで、「親族」と訳せるような現地語概念を基盤としてそのあり方などを論じる研究です。「親族の都立」は、フィールドワークにおける民族誌的記述の中に「親族研究」をもぐりこませていったといえます。シュナイダーが1984年に親族否定論の決定版を出版した頃(Schneider 1984)、私は、依然として親族に関する議論をしていましたが、それは、フィールドデータをどのように分析するのかという問題に関した議論だったという点で、都立大の親族研究の流れの中にあっただと言えます。ただ、シュナイダーが否定した系譜的、生物的な関係による親族のそれ以外の関係への広がりに関心をもち、そうした親族カテゴリーの在り方をニーダムの言う多配列という概念で捉えることはできないのかという関心を持っていたという意味で、単配列的な親族論ではない多配列的な親族論の可能性を探っていたことは確かです。それは、親族という概念はないという切り口ではなく、捉え直した親族概念ならありえるのでは、という姿勢でした。

3 ポストコロニアル人類学

フィールドワークに重点を置き、親族論も民族誌の中に潜り込ませる形で継続してきた都立の社会人類学は、しかし、フィールドワークや民族誌の「欺瞞性」を追求した『ライティング・カルチャー』や、本質主義的な捉え方を根底から批判したポストコロニアル人類学によって、大きく揺すぶられることになりました。自文化中心主義を批判する文化相対主義的な立場からの人類学研究が、そのまま「本質主義的である」という批判にさらされることになったからです。この大きな転換点を迎えた人類学ですが、私見では、こうした新しい潮流に身を任せる方向に都立の社会人類学は行かなかったように思えます。むしろそうした流れに批判的な立ち位置が多かったように思えるのです。例えば、ポストコロニアルな議論にいち早く反応し、それに対する批判を展開したのは小田さんです。彼は、本質主義的なとらえ方を近代特有の論理と捉え、そうした枠組みを批判するとともに、脱構築を主体とするポストモダン、あるいはポストコロニアル人類学も、こうした近代の論理にからめ捕られていると批判し、旧来の本質主義的なとらえ方に甘んじていた人類学でもなく、また空疎なポストコロニアル人類学でもない道を探る議論を展開しました(小田1996)。

小田さんの議論の特徴は、本質主義的な捉え方がダメだからすべてを脱構築して解体すべきだ、という議論に異議を唱えた点だといえます。私はこの点に関しては小田さんに

全面的に同意するものです。多配列的な親族論の在り方を考える中で、単配列的思考、すなわち科学的思考とは異なる思考の在り方が、フィールドワークを通じて知ることになった人々の生活の中に見出せるのではないかという考え方が、強くなっていました。つまり、小田さんの言う近代特有の「種的同一性」に基づいた本質主義的な視点、すなわち単配列的な視点とは異なる、フィールドの現場における多配列的な視点を考えるという立場にたっていたということです。そしてそれは、共通な要素で作上げられるカテゴリーは、基本的に排他的であり本質主義的になるのだから、そうしたカテゴリーを解体するべきだ、という議論に対して、共通な要素で出来上がるわけではない多配列的なカテゴリーを考えたらどうだろうかということでもありました。ポストコロニアルな議論でよく言われた異種混淆論は、カテゴリーというのは同質的な要素で出来上がっているという考え方への批判であり、そうしたカテゴリーの解体だったわけです。しかし、それは単配列的なものへの批判にすぎないと私は考えます。私たちは多配列的な枠組みのあり方に、フィールドの現場を通して、もっと耳を傾けるべきではないだろうかと考えた次第なのです。

ところで、都立の人類学は、松田素二さんの言う「科学的啓蒙主義」の路線に従った人類学研究であるといえるかもしれません(松田 1996)。そしてそれは、ライティング・カルチャー・ショックやポストコロニアル人類学の新しい流れの基盤となっている「ロマン主義」的な研究に乗っかりそこねた旧態然とした人類学であるという批判を受けることもありえるかもしれません。しかし、「旧態然」とした研究を続けていくことができるのでしょうか？『ライティング・カルチャー』によってフィールドワークの政治性が主張された後、今でも、誰がそうしたことに無自覚にフィールドワークをしているのでしょうか？また、旧来の人類学が本質主義的な視点に立脚していたと指摘された後、誰が本質主義的な見方のままの議論を継続していると言えるのでしょうか？旧態然とした人類学を今日続けるのは、難しいのです。

だからと言って、流行の「ロマン主義」的研究に流れないのはいうまでもありません。その理由は、既に小田さんが論じています。フィールドワークそのものを否定しようとしたポストコロニアルな議論は、「純粋な客観」がなければ「主観」しか残らない、あるいは、本質主義的なカテゴリーは解体するしかない、という「あれかこれか」という二者択一を迫る議論でした。そして、そうした議論がまさに近代の「種的同一性」の論理に毒されていると言えるのです。そうした論理の空回りを見据えることで、流行に流れず、旧態とは別の地平にたつ人類学を模索しているのが、私たちの現状と言えるのではないのでしょうか。

しかし「ロマン主義」的な流行に流れる人類学が多いことも確かです。それが、「静かな革命」とか「存在論的転換」とか言われている今日の動きだとおもっています。詳細は出口さんの発表に任せるとして、ここでは、フィールドからの声を踏まえた実証的研究という視点から、そのいい加減さについて、1, 2の例を取り上げておこうと思います。

4 存在論的転換

存在論的転換の議論で、ラトゥールと並んでしばしば言及されるのがマリリン・ストラザーンです。彼女の比較の視点であるパーシャル・コネクションは今日の人類学に多大な影響を与えているとされ、その発想はメラネシア的思考から生まれているとよく言われます。しかし、彼女がパーシャル・コネクションという視点を提示した著書において、人とモノの混淆したメラネシア的思考については事例をあげて語られています（Strathern 1991: 76）、メラネシア人が比較を語っている事例は一度も出てこないのです。登場するのは、人類学者が解釈したものばかりであり、それらの解釈がメラネシア人のやり方として提示されているわけです（Strathern 1991: 75,80,81, etc.）。もちろん人類学は民族誌的事例の解釈を行います。しかし、その解釈が如何に妥当性を持っているのかということ、様々なデータと付き合わせて詳細に検証することが必要だと思います。ストラザーンの著書では、これら人類学者の解釈がどこまで妥当かということについて議論するのではなく、まるで通文化的比較法のように、人類学者の解釈がそのまま民族誌的な「事実」であるかのようにして並置され比較されていくのです。

確かに、ストラザーンの捉えたパーシャル・コネクションに基づいた比較のやり方というのは、メラネシア世界を飛び越えて適用できるように思えます。つまり、私たちはAとBを比較するときには、あるコンテキストでは、AにあるモノとBにあるモノを比べ、別のコンテキストではAで起こったある出来事とBで起こった出来事を比べ、別のコンテキストでは、Aで実践されているあるマナーとBで実践されているマナーを比べるのであり、決してトータルにAとBを比較するわけではないということは言えるでしょう。そして、こうした事例に遭遇した時、人類学者がすべきことは、人々が行う比較の仕方を解明することだろうと私は思っています。なぜ、ある時には特定のモノを用いて比較し、別の時には出来事を比べるのか、という点を考えるということです。こうした思考のあり方は、まさしくユダヤ人というクラスを構成する時に選択される様々な規準、そしてその恣意的な使い分けとそのまま結び付くと考えます。つまり、私には、こうした比較の仕方こそが、チェーンの輪をつなぐように、しかも、別々の規準で結びつける多配列思考のやり方であると思えるのです。しかしストラザーンは、こうした比較の仕組みを読み解くという作業をするのではなく、自らが比較研究をするときに同様の手法を用いるという方向性へと舵をとっています。そして、例えば、アメリカのテネシー州における冷凍胚をめぐる訴訟とパプアニューギニアのハーゲンにおける豚をめぐる夫婦の争いを比較していくのです（Strathern 1999:153）。

最後にもう一人取り上げましょう。アルフレッド・ジェルです。彼の議論におけるアブダクションの使い方は、提唱者のパースのいうような、よくわからない出来事から仮説を導き出すというプロセスではなく、指標を通して「推論」するプロセスを指しています。たとえば、クラ交易においてやり取りされる財物は、指標として、それを受け取る人に贈

与してくれる人の力強さや身体の美しさなどをアブダクトさせるというのです(Gell 1998:230)。確かに、こうした推論が行われることはあり得ることで、それが呪術や芸術におけるキーワードとなるという視点自体を批判するつもりはありません。問題は、そうした推論がどのように行われているのかを解明、分析するというのではなく、そのアブダクション、すなわち推論を自らの事例分析、あるいは解釈に用いるという点なのです。彼は、古代ギリシャの傀儡人形呪術で、人形に犠牲者の名前を書きつけるときに、「私は縛る、私は縛る」と唱える点を取り上げ、その類似性を、古代タヒチの儀礼に見いだす議論を展開しています。その儀礼では聖なる力を持つトッオと呼ばれる物体が主人公なのですが、トッオは、それを直接見ると死んでしまうほどの力を持っているので、普段はタバなどで嚴重に「包み込まれ」て組なわで「縛られている」います。しかし、儀礼では、それを包む過程で挟み込まれた赤い羽根を取り換える作業が行われ、これらの羽は首長らに分配されることで、彼らの世俗的な権力を保障する、と分析しています。そして、犠牲者は傀儡人形に「縛り付けられ」コントロールされるのと同様に、トッオは「縛りつけられ」その力は縛っているモノ、特に羽を通して分配され政治的コントロールに供される、と論じるのです(Gell 1998:114)。この分析で、傀儡人形に犠牲者が縛り付けられるのは理解できるし、強い力がトッオに閉じ込められているのも理解できます。しかし、羽はトッオを縛り付けてもいないし、その力を包み込んで閉じ込めているわけでもありません。だから傀儡人形と同じように羽が力をコントロールしているとは言えないと思うのですが、こうした思考の連鎖がアブダクションとして提示されるのです。そうであれば、アブダクションによる分析はいい加減だ、と言わざるを得ないだろうと思います。

こうしたいい加減な「推論」による分析と解釈を、何ら批判的に検証することなく援用する日本の研究者たちが大勢います(春日 2011)。ここでは、アブダクションは、より一層、フィールドから分離した、いい加減で自分勝手な推論となり、ロマン主義的な主観による解釈が横行していると私には思えます。フィールドからの声を自らの主観でねじ伏せるこうした流行に、都立は乗るはずがないと思うのです。

そろそろ既定の時間がきましたので、このあたりで私の発表は終了したいと思います。ありがとうございました。

引用文献

Gell, A.

1998 *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Clarendon Press.

春日直樹 (編)

2011 『現実批判の人類学—新世代のエスノグラフィへ』世界思想社

松田素二

1996 「「人類学の危機」と戦術的リアリズム」『社会人類学年報』22:23-48.

長島信弘

- 2015 「岡正雄と社会人類学—都立大学社会人類学研究室の貢献」未出版草稿：国際シンポジウム「岡正雄の人類学的学問形成過程」の主催者クライナー博士に宛てた私的コメント

Needham, R.

- 1971 “Remarks on the Analysis of Kinship and Marriage.” In R. Needham ed. *Rethinking Kinship and Marriage*. pp.1-33. Tavistock.

小田亮

- 1996 「ポストモダン人類学の代価」『国立民族学博物館研究報告』21:807-875.

小川正恭

- 2008 「親族研究の消滅はあったのか—日本の教科書の記述から—」『ソシオロジスト』10:51-72

齋藤尚文

- 1980 「同等規則分析—親族分類システムのタイポロジーとシリオノ親族名称体系—」『民族学研究』45-3:222-243.

Schneider, D.M.

- 1972 “What is Kinship All about?” In P. Reining ed. *Kinship Studies in the Morgan Centennial Year*. pp.88-112. The Anthropological Society of Washington
- 1984 *A Critique of the Study of Kinship*. Univ. of Michigan Press.

Strathern, M.

- 1991 *Partial Connections*. ASAO Special Publications. Rowman & Littlefield Publications, Inc.
- 1999 *Property, Substance and Effect: Anthropological Essays on Persons and Things*. Athlone Press.